

森の中のメレンゲ く高鼻峠く

土砂降りの雨が、小降りになった。雨宿りをして、荷物用の牛が見つかるのをまっていたバードは、牛が到着すると、再び出発した。バードに乗せたメス牛と荷物用の牛は、ゆっくりと水田の中を歩いていく。先のほうを歩くイトーが、立ち止まって祠（ほこら）に向かって手を合わせている。

祠の横の杉の木には、穴の開いた石が縄に結わえられていくつかぶら下がっている。



イトー、どうしたんだい。これ、石の神様？」

「ノー、これは耳の神様です。耳の病気になった人の治したいという願いが叶うのだそうです」

「あら、いやだ。そのぶら下がっている石、穴が開いて薄っぺらくて、あなたの耳のようね。イトー耳が悪かったの？」

「いやそうではありません。耳は人一倍良いです」

「なら、どうして？」

「バードさん、私は通訳です。通訳は、誰よりも耳がよくなくてはなりません。日本語と英語は発音からして全然違います。だから、僕は耳を良くしてなんとかバードさんの言葉を全部きちんと理解し、みなさんにきっちりと伝えたいのです」

「へえー！」

まだ18歳のくせに、時々イギリス人何するものぞ、キリストより仏陀が偉いという考えを時々口にするイトーを、バードが苦々しく思うことも度々だった。でも、ちゃんと、自分のことを考えてくれる。そう思うと、イトーのことを少しだけ見直した。

「さあさあ、行きましよう。これからのぼる峠は、バードさんたち西洋人の特徴をとらえた峠ですよ」

「何ていう名前？」

「ハイ ノーズ！」

「え？」

「鼻が高いと書いて高鼻峠と読みます。そういえば、バードさんあまり鼻は高くありませんね」

「そうよ、レデイたるものあまり鼻が高くてはバランスが悪いでしょ？」

この辺りは、バードが通ってきた荒川の上流で横川と呼ばれている。四方を山に囲まれているが、平らな土地があり、雨にけむった水田が続いている。バードに乗せた牛と、荷物に乗せた牛がゆっくりと歩いている。先頭は、案内人とイトーだ。道はやがて山の中へと進んでゆく。

「あら、かわいいカエル」

バードに乗せた牝牛の頭に、いつの間にか、小さな青いカエルが乗っていた。

「イトー、見てよこのカエル。かわいくない？」

「そうですね、僕が歩きたびに、小さなカエルがびよんびよん飛んでいくんです」

森の中に小さな池がある。そこを通ると、ひとしきりカエルの合唱が大きくなった。

「キーコー、キーコー」

「ギーコー、ギーコー」

「ギリリー」

これは、日本人が弾く三味線の音楽よりましだと、バードは思った。宿で聞く三味線にバードはどうしても慣れることができないが、大自然の中のカエルの鳴き声は、バードの心を和ませてくれた。

「バードさん、あの木の枝を見て下さい。白い泡の固まりが見えるでしょう」  
目を向けると木の枝にぽつりぽつりと泡が見えた。

「何だと思います？」

「うーん、何だろ。お菓子のメレンゲみたいにも見えるけど」



「あれは、モリアオガエルの卵だそうですよ。バードさんの目の前にお友達もあの泡から生まれてきたのだそうです」

「そうか、賢いわね。カエルの天敵は蛇ですから、卵を食べられないようにしてるんでしょね」

それは一瞬の出来事だった。1羽の鳥が、音もなく飛んできて、泡の近くにいたカエルをわしつかみにして、飛び去っていった。

牝牛2頭を中心とした一行は、高鼻峠を越えて森の中を進んでいく。所々にある木の枝の切れ間から、横川が見え隠れしている。いったん、下って田んぼの中の道に出て、再び山道を登っていった。